

“葦” 42号発刊に寄せて

奈良県立医科大学 附属病院長 榊 寿右

このたび看護研究の活動報告である“葦”第42号が発刊されます。医療が年々進歩し、高度化しています。患者さんの要求度も増大してゆく中で、看護の質、内容そして技量も高度化させて行かねばならない状況にあります。今年は病院機能評価機構からVersion 6の認定も受けました。医療安全、院内感防止も質の高いレベルで遂行してゆかねばなりません。また大学病院では電子カルテばかりではなく、至る所でIT化が進んでいます。看護師さんもITに十分に対応していけるようにITに対する知識とそれを使いこなせるだけの訓練がなされていないと大学病院としての看護活動はできないでしょう。一方、IT化が進むことによって人と人の触れ合い、特に心の触れ合いが欠如していく傾向にあります。病院は医療を受ける人とそれを提供する人の触れ合いの場であり、他のどの分野よりも濃厚に人間性が求められる場でもあります。

看護研究を行い、それをまとめて報告し、看護活動に応用してゆくことは大学病院、特定機能病院としての大きな使命です。本学には看護学科があって、そこには専任の教官がおられますが、その教官が本当にあるべき看護の姿を追い求めているのか疑問に思うことがあります。看護学科の教官も附属病院看護部のレベルの高さを認識したうえで、両者における共同研究が進んだら良いと願っています。また、かなりの講義や実習に附属病院の幹部看護師が加わるようになったとは聞いていますが、附属病院の看護師長や主任クラスの人たちだけでなく、認定看護師や専門看護師も看護学科の教育に教官として携わり、学生との係わりも深めてゆかなければならないと思っています。そうならなければ、本学学生の本学附属病院への就職状況も改善しないし、同時に研究心（リサーチマインド）を持った看護師の増加にも繋がらないと信じています。そうすれば、さらに質の高い看護研究の推進にも役立つことでしょう。

葦はイネ科の多年草で各地の水辺に自生し、世界で最も分布の広い植物であり、地中に扁平な根茎を走らせ大群落を作ります。本研究誌が何故“葦”と名付けられたか知りませんが、大群落を作ることから研究の大群落を意味しているのでしょうか。そしてそのことが営々と続けられ今回で42号となります。この看護研究がもっと幅広く行われ、ますますレベルの高いものになっていくことを望んでやみません。

今年は3月11日に東北関東に大地震が生じて、それにより、東北の太平洋沿岸に大津波が襲い壊滅的打撃を起こしました。またそれに続く原子力発電事故、さらには台風12号による奈良県南部の災害をもたらした大変な年でありました。看護研究にも災害対策に特化した研究が行われても良いのではないかと考えています。